
心の穴

M U K K U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の穴

【Nコード】

N1889W

【作者名】

MUKKU

【あらすじ】

新任の高校教師として働いている蘭は半年前に新一に別れを告げて色のない世界を過ごしていた…。

prologue:side 蘭(前書き)

新連載です。

prologue : side 蘭

「あの、毛利先生！」

と後ろから声をかけられたわたしは、

「はい！」

と振り向いた。

わたしの名前は毛利蘭。

半年前に大学を卒業して新任教師としてこの鳥矢高校で国語の教師をしている。

今、声をかけてきたのは同僚の間船章吾先生だった。

間船先生は20代半ばの英語教師で優しそうな雰囲気からけっこの女子生徒に人気があるらしい。

「間船先生、どうしましたか？」

とわたしが聞くと間船先生は、

「毛利先生、少しお話ししたいことがあるので、明日お時間いただけますか？」

と聞かれた。

明日は祝日で休みだし、副顧問をやってる空手部の練習は午後からで午前中なら用事もないから、

「ええ…午前中なら構いませんが…」

と答えると間船先生が嬉しそうに、明日、午前10に米花町のとある喫茶店と時間と場所を指定して去って言った。

次の日、わたしは間船先生に指定された喫茶店に来て少ししてから間船先生はやって来た。

「すみません…待たせちゃいましたか？」

と間船先生が言うのでわたしは、

「いえ、わたしも今来たところですし、まだ10時前です…」と返した。

2人とも飲み物を注文したあと、わたしは、

「それで、話ってなんですか？」

と尋ねた。

すると間船先生は少し焦った様子で、

「えっ…えっと…毛利先生、オレ、毛利先生が赴任してきたときから可愛いな…と思っていて…もし良かったらお付き合いしてもらえませんか？」

と言ってきた。

いきなりの告白にわたしが驚いていたけど断ろうと、

「あ…あの…」

と口を開こうとしたとき、

「返事はまた今度でいいです…こんなところ生徒に見られたら少しマズいので学校から少し遠いこんなところまで来ていただいてありがとうございます…」

と言って2人分の会計を置いて喫茶店から出て行った。

わたしは頼んだアイステイーを飲み終わったあと店を出た。

産まれてから半年前までずっと暮らしてた米花町…でもここに来るのも半年ぶりだな。

とわたしは景色を見渡しながら思っていた。

米花町から鳥矢高校へは通ってる生徒がいるくらいだから実家から通えない距離ではないけどわたしはあえて学校の近くのアパートで

一人暮らしをしていて、一人暮らしを始めて以来、今日まで1度も米花町には来なかった。

この街にはアイツとの思い出がありすぎるから…。

prologue:side蘭(後書き)

久しぶりのリクエストではない小説です。

今回の小説は全部、蘭、新一、園子の3人の一人称で書こうと思っています。

少々暗い話になると思いますが最終的にはハッピーエンドになる予定です。

01:side 蘭

半年前の大学卒業まであと数日というある日、わたしは新一とデートをしていて毎度のごとく殺人事件に遭遇していた。

犯人は新一にトリックを暴かれてその決定的な証拠を犯人に突きつけられるとガックリとうなだれた。

目暮警部が、

「さあ、あとは署の方で…」

と犯人に手錠を掛けようとする。と犯人は目暮警部を振り払って、隠し持っていたナイフを取り出して、

「どけー!!」

と言つてわたしの方に迫ってきた。

「蘭!!」

と新一の声が聞こえたけど、咄嗟のことで反応ができず、わたしは、刺される!!

と覚悟して目をつぶった。

しばらくしても痛みがなく、わたしが恐る恐る目を開くと、新一がわたしを庇うように犯人の間に立っていて、新一の足元にはポタポタと血がたまっていた。

「新一!!」

と叫ぼうとして新一を見たときわたしは言葉を失った。

ナイフが突き刺さっているのはちょうど新一の胸の高さだった。

「新一!!」

と絶望に打ちのめされながら叫ぶと新一は、

「大…丈夫だ…」

と言ったあと犯人を思いっきり蹴飛ばした。

高校に入るまでサッカーをやっており未だに脚力が衰えていない新一の蹴りの威力はものすごく、犯人は一撃でノックアウトされた。

「工藤君!大丈夫なの?」

と佐藤刑事に聞かれた新一は、

「ええ… なんとか… 咄嗟に… 胸を腕でガードして… 助かりました…」
と右腕に刺さったナイフを見せながら言った。

そのあと、新一とわたしは佐藤刑事の車で米花総合病院へ連れてかれた。

新一は何針も縫う大怪我で傷がふさがるまで動かさないようにギプスもされた。

病院からの帰り道、新一の怪我はわたしのせいだ… と落ち込んでいるわたしに、新一は

「蘭、オメーのせいじゃねーから気にすんな!!」

と笑って言うてくれたけど、わたしの頭の中では、

わたしのせいだ… 今回は運良く胸を腕でガードして新一は一命を取り留めたけど、腕でガードするのが遅れてたら… 新一は…
という言葉がループしていた。

新一がふと、

「こりゃギプスがとれるまでしばらく探偵は休業だな…」

とつぶやいたとき、わたしは鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

新一はそのあと、

「まあ、最近忙しかったし、蘭とゆっくり過ごす時間ができてちょうど良かったか!」

と新一は笑って言うてくれたけど、その前の言葉の衝撃でその言葉はわたしの耳には入って来なかった。

わたしのせいで新一は探偵をしばらく休業しなきゃいけない… わたしは空手はできるけど、それ以外で新一の探偵業の役に立たない… その空手だって、今回は咄嗟のことで反応できなくて新一を怪我させてしまった… わたしは… 新一の… 足手まといでしか… ない…
「蘭? どうした?」

と新一が急に立ち止まって微動だにしないわたしに聞いてきたとき

わたしは口を開いた。

「…別れよう？」

「は？」

と新一が訳解らないという感じで聞き返すとわたしは、

「もう無理だよ…新一事件に行くたんびに、怪我しちゃうんじゃないか…もしかしたら命を落とすんじゃないかって不安になりながら待ち続けるの…もう耐えられないよ…」

と続けた。

本当はこんなこと思ってないし、別れたくない！！

でも…わたしは新一の足手まといでしかない…そう新一に言っても新一は優しいからきつと『足手まといなんかじゃない』って言うてくれる…でも…実際わたしは新一の足手まといだ…。

「お、おい蘭！！何言って…」

と新一が言いかけたときわたしは、

「サヨナラ！！」

と言って新一から逃げるように走って帰った。

これ以上新一と一緒にいたら泣き出しそうだったから…。

家に帰ったあとわたしは1人でずっと泣き続けた。

それ以来新一とはあつていない。

あの後しばらく新一から電話やメールが来たけど全部無視してたら来なくなった。

その後わたしは鳥矢高校の教師になり、鳥矢町で一人暮らしを始めた。

教師の仕事はやりがいがあるし、生徒と年が近い分生徒たちと友達みたいな感覚で接することができて慕ってくれる生徒も何人かいてけっこう楽しい。

でも新一と別れてからわたしの世界は色を失った…新一がコナン君になっただけで行方不明だと思っていたときよりもずっと何も無い無色の世界…。

午前中に久しぶりに米花町へ行ったせいかいつもよりも新一のことを考えてしまい、空手部の練習のときもずっと、ボーっとしていた。

空手部の練習が終わり家に帰る途中、突然後ろから、

「蘭!!」

と声をかけられた。

01:s i d e 蘭(後書き)

なんとか2日連続で更新できました…。
次もなるべく早く更新しようと思うのでよろしくお願いします。

02:sside園子(前書き)

今回は園子サイドです。

02:side園子

わたし、鈴木園子！

今はパパが会長をやってる鈴木財閥の会社でOLとして働いているわ！

まあ、会長の娘とは言えまだ入社半年のただの新人だけだね…。

今日は仕事休みで、フサエブランドの限定バッグを買いに鳥矢町のお店に行った帰り、見覚えのある後ろ姿を見かけて

「蘭！！」

と声をかると蘭は振り向いて少し驚いた顔で、

「園子！久しぶり！どうしたの？」

と聞いてきた。

「このフサエブランドの限定バッグを買いに来たのよ！！蘭は仕事？」

と聞くと蘭は、

「うん、空手部の練習！」

と言った。

「まったく…土日もガキンチョどもの部活を見なきゃいけないなんて…先生もたいへんだね…」

と言うと蘭は苦笑しながら、

「空手部の副顧問だからね…でも空手好きだからそんなにたいへんじゃないし…」

と答えた。

わたしが、

「蘭！久しぶりに飲みに行かない？」

と誘うと蘭は笑って、

「うん…」

と答えた。

「蘭…大丈夫？」

「らいじょぶ〜!!」

飲み始めて2時間、蘭は呂律が回らないほどベロンベロンに酔っ払っていた…。

蘭は大学的时候はこんなに酔いつぶれるほど飲だことなかったのに…。

「大丈夫って…ぜんぜん呂律が回らないんだけど？飲みすぎじゃない？」

とわたしは心配して聞くと蘭は、

「らって〜、同僚の先生たちと飲むときは遠慮して酔えるほど飲めないんらもん〜！園子とは気心の知れた仲らから遠慮せずに飲めるんだけど〜…」

いや、こんなベロンベロンになるほど酔うのは遠慮してほしいんだけど…てか蘭、おじさんに近づいてる気が…流石親子…。

とわたしは心の中でツツコミをいれたけど蘭がこんなに飲む理由に心当たりがあって心配そうに蘭を見た。

新一君だ…蘭が新一君と別れて半年、わたしは蘭の本当の笑顔を一度も見えていない…蘭は自分で新一君を振った理由は詳しく教えてくれないから本当のことはわからないけど、きっと新一君のことを忘れられないんだと思う…新一君がいないことでの心の穴を少しでも埋めるため…いや、心の穴を少しでも誤魔化すために蘭は酔いつぶれるほど飲んでるんだと思う…。

「蘭…大丈夫？」

と心配そうにわたしが聞くと蘭は笑いながら、

「らいじょぶらっていつてるでしょ〜！」

と言ったけど酔いつぶれるほど飲んでる蘭はとても痛々しかった。

ホント…素直になればいいのに…。

さらに1時間後、

「蘭！！寝ないで！！自分の足で歩いて！！」

「らい…じょ…ぶ…起きて…る…よ…」

「寝るな…！！」

わたしは酔いつぶれて寝そうになっている蘭に肩を貸して蘭の家に向かっている。

これじゃあ蘭のアパートに着くのいつたいつになることやら…あの居酒屋から蘭のアパートまで普通なら15あれば着くの帰路について30分くらいだった今でもまだ蘭のアパートに着いていない…。

…ん？蘭が静かになった…。

と思った瞬間、わたしの肩に掛かった重みがさらに重くなった。

「ちよっ…寝ないでよ蘭！！わたし、アンタをアパートまで担げるほど体力ないんだけど！！」

とわたしが叫ぶと、

「ん…らいじょ…ぶ…」

と蘭は目を覚ました。

ホッとしたわたしはその後、蘭が眠らないように声をかけ続けてどうにか1時間かけて蘭をアパートまで運ぶことができた。

蘭をベッドに寝かせた後、ハア…疲れた…と部屋を出ようとしたとき、

「新…」

という蘭の寝言が聞こえて振り返ると蘭の目元に涙が光っていた。

わたしは、

「ホント…素直じゃないんだから…」

と呟いて蘭のアパートから出ていった。

03::side 新一(前書き)

今回やっと新一が出てきます。

03: side 新一

「イヤー、いつもスマンね工藤君!!」

と事件を解決したオレは目暮警部に背中をバンバン叩きながら言われた。

オレは工藤新一、高校生の頃から学業の傍ら探偵をやっていて半年前に大学を卒業してから探偵一本でやっている。

「でも最近、なんか前より雰囲気が尖ってる気がするんだけど…」と高木刑事が心配そうに聞いてきた。

半年前に蘭と別れてから蘭のいない空白を誤魔化すために前以上に事件にのめり込んでいるせいか最近犯人に対して容赦がなくなっ
たし、雰囲気キツくなったとよく言われる。

やっぱオレ蘭がいねーとダメだっただけだ…。

と心の中で自嘲ぎみに笑いながらも、高木刑事には、

「そんなことないですよ…」

と誤魔化した。

すると、いっしょに事件の捜査してたオレに先に事件を解決されて不機嫌な小五郎のおっちゃんが、

「コラア探偵ボウズ!! オレ様がヒント出してやって解決したんだから偉そうにしてるんじゃない!!」

と怒鳴ってきた。

確かにおっちゃんのセリフが事件を解くヒントにはなっただが…おっちゃんはヒント出してる積もりなかっただろ…。

とおっちゃんをジト目でみていると、おっちゃんに、

「何だその目は?…とにかく!! 今度こそオメーより先に事件を解いてやるから覚悟しとけ!!」

と宣戦布告された。

おっちゃんはオレと蘭が別れたことを知ってるはずだけど、そのことには触れて来なく、態度も今までと変わらない。

…まあ、ずっと邪険にされてるってことだけ…。

おっちゃんだってオレと蘭が別れたことについて蘭の父親として言いたいこともあるだろうけど、何も言って来ないのはおっちゃんりの不器用な優しさなんだと思う。

オレが蘭のいない空白を誤魔化すために事件にのめり込んでいることに気づいているから何も言って来ない…こういうところだけでなく、いつもこんだけ鋭いとオレも助かるんだが…。

「おっちゃん…ありがとな…」

と呟いたがおっちゃんの耳には届いていないらしかった。

03:s i d e 新一（後書き）

新一と小五郎って場面を書きたくてこんなふうになりました。

小五郎にとって蘭が心配なのは当たり前前だけど小さい頃から見てきた新一のことも心配だろうなど。

04:side 蘭

園子と久しぶりに飲んで酔いつぶれてしまった一週間後、わたしは園子といっしょに大阪に来ていた。

今日、大阪に来た理由は今日は服部君と和葉ちゃんの結婚式だからだ。

「なんか、目つきの悪い人が多いね…」

と園子が披露宴の最中にお客さんを見ながら言うのにわたしは苦笑しながら、

「刑事さんが多いからね…」

と答えた。

服部君のお父さんは大阪府警本部長で、和葉ちゃんのお父さんは刑事部長だし、服部君も和葉ちゃんも今、大阪府警で刑事をやっているからこの披露宴には大阪府警の刑事さんがたくさん来ている。

まあ、服部君はしばらく経験を積んだら刑事を止めて探偵を始めるつもりらしいけど。

わたしと園子が和葉ちゃんと服部君のところに行って、

「服部君！和葉ちゃん！結婚おめでとー！！」

と言うと和葉ちゃんは、

「蘭ちゃん！園子ちゃん！ありがとオー！！」

と本当に幸せそうな笑顔で言った。

服部君も幸せそうに、

「姉ちゃんらも遠くからはるばるスマンな〜！！」

と言っていた。

「和葉ちゃん！！ウエディングドレスすっごくキレイだったよ！！」

とわたしと言うと園子も、

「うんうん…ホント羨ましいよ…」

と頷きながら言った。

わたしたちのセリフに和葉ちゃんが、

「蘭ちゃんや園子ちゃんやてウェディングドレス着たらめっちゃキレイになると思うで!!」

と言ってくれた。

園子は和葉ちゃんのセリフに、

「真さん早くプロポーズしてくれないかな…」

と言っていたけど、わたしは新一しか好きになれないけど新一とは別れてるから結婚は無理だな…と思って思わず、

「わたしは…どうせウェディングドレスなんか着ないよ…」

と呟いてしまった。

「蘭…」

「蘭ちゃん…」

という園子と和葉ちゃんな声で我に帰ったわたしは慌てて笑顔を取り繕って、

「な～んてね!!ゴメンね白けるようなセリフ言っちゃって…やっ

ぱわたし冗談って苦手で…」

と明るく言つと服部君に、

「ムリすんなやネーチャン…」

と言われた。

「え？」

とビックリして服部君の方を見ると服部君は真剣な顔でわたしの方を見ながら、

「ツライのにムリするもんやない…アンタにフラれて工藤も辛そうやけど、ネーチャンも工藤と同じくらい辛そうや…何があったか知らんけど辛いんやったらムリせんでええ…」

と言った。

わたしは服部君から目をそらして、

「別にムリなんか…」

と言いかけたとき、後ろから、

「よっ!服部!!和葉ちゃん!!結婚おめでとう!!」

という声が聞こえた。

振り返るとそこには世界で一番愛してるけど、一番会いたくない人物、工藤新一がいた。

「蘭……」

と驚いた表情で新一が言ったときわたしは耐えられずその場から逃げ出した。

05:s i d e 園子

「ちよっ…蘭!!」

とわたしは新一君から逃げるように走り去る蘭に声をかけたけど蘭は止まらず走っていた。

まったく…なんて間の悪いときに現れるのよ新一君は!?

と訝りながらわたしは、

「新一君!絶対、追って来ないでよ!!」

と念を押して、

「お…おい!!」

と何か言いたそうな新一君を完全無視して蘭を探しに行った。

10分ほど蘭を探して、披露宴会場のベランダで外を見ながらぼーっとしている蘭を見つけた。

「蘭…」

とわたしが声をかけると蘭は振り向いて、

「あっ!園子…ゴメンね急に走ってっちゃって…」

と笑いながら言ったけど、蘭の目元には涙が浮かんでいた。

自分の目元に涙が浮かんでいることに気づいた蘭は、

「ヤダ…何泣いてんだろわたし?…」

と笑いながら涙を拭った。

「蘭…大丈夫?」

と聞くと蘭は笑いながら、

「わたしってダメね…新一の顔見ただけで動揺しちゃうなんて…でも、泣いてたのは新一のせいじゃなくて、和葉ちゃんと服部君があんまりにも幸せそうだったから…」

と言っていたがまたポタポタと涙が流れていた。

蘭は新一君のせいで泣いてるわけじゃないって言ってるけど顔を

見ればすぐにわかる。

新一君と再会してしまったことが原因だって…。

だって、今の蘭すごく表情が痛々しいんだもん…。

あまりの痛々しさ見てられなくなつたわたしは蘭を抱きしめて、

「無理しなくてもいいよ！泣きたいなら思いっきり泣けばいいじゃない！！わたしがそばにいてあげるから…」

とわたしまで泣きそうになりながら言つた。

「園子…ありがとう…もう大丈夫…」

と蘭は言つたけど蘭の顔は全然大丈夫ではなかった。

「そんな顔で和葉ちゃんや服部君に会つたら心配しちゃうよ…ちょっと早いけど帰ろっか？」

とこの会場にいてまた新一君に出くわしてしまうことを危惧したわたしが提案すると蘭は素直に頷いた。

このときわたしの頭に、蘭がどうして新一君をつつたのかという疑問が今まで以上に浮かんできた。

それと同時にわたしは確信した。

わたしじゃ今の蘭の心の穴を埋めてあげることにはできない…。

蘭の心の穴を埋めて、こんな状態の蘭を救えるのはアイツしかない！！と。

06:s i d e 新 一 (前 書 き)

更新が約半月も開いてしまってますみません…。

06: side 新一

服部と和葉ちゃんの結婚式の2日後、依頼もなく推理小説を読みふけていると、

ピンポン

とチャイムが鳴った。

依頼かな？

と思いながら玄関に出るとそこにはガキの頃からの腐れ縁の鈴木園子が立っていた。

園子は思いも寄らぬ来客に驚いているオレに構わず、

「新一君！久しぶりね…」

と言ってきた。

服部たちの結婚式で会ったけど会話はなかったし久しぶりっちゃ

あ久しぶりか…

と思いながらも、

「どうしたんだよ急に？」

と聞くと、園子は真面目な顔で、

「話があるの…」

と言ってきた。

依頼ではなさそうだなと思いながら、

「まあ立ち話もなんだし上げれよ…」

と言つと園子は頷いた。

「んで、話つて？」

と応接室に案内してコーヒーを出した後園子に聞くと、

「蘭のことよ！！」

と言ってきた。

オレは何でもないかのように、

「蘭がどうしたんだ？」

と聞いたが内心蘭に何かあったんじゃないかと不安でいっぱいだった。

しかし園子の、

「アンタ何で蘭にフられたのよ!？」

と言うセリフに思わず、

「ハア？」

と言ってしまった。

そんなオレの態度が気に入らなかったのか園子はムツとした表情になって、

「だからー!! 蘭は未だにアンタのことが好きで好きでしょうがな
いくらい好きなのに何でアンタが蘭にフられたのか聞いてんのよ!
!」

と強い口調で言った。

「蘭がオレのこと未だに好き!? 蘭がそう言ったのか？」

と驚いて聞くと園子は、

「そういうことには頑固な蘭が自分からそんなこと言うわけないじゃない!!」

と園子はそんなこともわからないのかというような表情で言った後、

「服部君と和葉ちゃんの結婚式でアンタとの再会の際の蘭の様子
でわからなかったの？」

と責めるような口調で言った。

園子のセリフにオレが、

「蘭のことになると冷静に判断ができなくなるんだよ!! オレにと
っちゃ蘭の気持ち読み取るのはものすごい難事件を解決するより難
しいんだ…」

と返すと園子はニヤつとして、

「新一君も蘭のことまだ好きなのね？」

と聞いてきた。

「当たり前ーだー!!」

蘭以外の女に興味ねーよ!!と心の中で叫びながら答えると園子はさらにニヤリと笑って、

「新一君!!わたしに依頼してみない?」

と聞いてきた。

「…依頼?」

とよく意味が解らず聞き返すと園子なフンと笑って、

「この推理クイーン園子様が蘭が新一君をつった理由を調査してあげるのよ!!さらに元サヤするのも手伝ってあげる!!」

とウインクしながら言った。

「推理クイーンって…オメーに推理クイーン園子のからくり教えたよな?」

とオレが呆れ顔で聞くと園子は、

「解ってるわよ!!わたしが推理クイーンになれたのはメガネのガキンチョだったアンタがわたしを眠らせてわたしの声で推理してたからってことは…でも、今回の件では日本警察の救世主さんよりわたしの方がうまくできるとおもうけど?」

と答えた。

オレが、

「んで、依頼料は?」

と聞くと園子はニヤリと笑いながら、

「そーね…別にお金に困ってないし…後払いで…蘭の心からの笑顔を見せてくれるっていうのはどう?新一君と別れてから1度も見てないし…」

と言った。

園子のセリフにオレは不敵に笑って、

「その話…乗った!」

と答えた。

06:side新一(後書き)

個人的なことです。が蘭のことで結束する新一と園子って構図、結構好きです。

07:side 蘭

「蘭!!合コンしない?」

と突然園子に誘われたのは服部君と和葉ちゃんの結婚式の5日後だった。

「ご、合コンって…園子には京極さんがいるじゃない!!」

とわたしが驚いて言うのと園子は、

「わたしだって浮気するつもりはないわよ!ただ、大学の仲間呼んでパーツと飲みだいなって思ったの!!で、ただみんなで飲むだけじゃおもしろくないからどうせなら合コンにしちゃおうって!!」

と笑いながら言った。

「みんなにはもう話してあるの?」

と聞くと園子は、

「うん、みんなノリノリだったよなんたって相手は公務員だし!!」

ニコニコしながら答えた。

「公務員?」

とわたしが聞くと園子はニヤつとして、

「そつ!警視庁の現役警察官たちよ!!高木刑事に頼んで何人が集めてもらったんだ!!」

と答えた。

「た、高木刑事って…佐藤刑事がいるじゃない!!」

と驚いて言うのと園子はケロッとした顔で、

「大丈夫!高木刑事には若くてイケメンな後輩に誘ってくれるだけで参加はしないから!!」

と答えた。

高木刑事…園子にいいように使われて…とわたしは高木刑事を気の毒に思った。

でもまあ、最近、新一に再会しちゃったりで元気のなかったわたしに気を使ってくれてるんだな…と感じたわたしは合コンに参加す

ることにした。

3日後の合コンでわたしと園子、大学るとき友達3人の計5人で合コンの会場であるお店に行くと相手の刑事さんたちはもう来ていた。

「すみませ〜ん！待たせちゃいましたか？」

と友達の1人が言くと、刑事さんの1人が、

「いやいやそんなことないよ！」

と答えた。

わたしは刑事さんの顔ぶれを見て知り合いがいないことに少しホツとした。

知り合いの刑事さんならわたしが新一の元カノだって知ってるだろうし、そうなったら少し気まずかったと思う。

ふと、わたしは5対5の合コンのはずなのに刑事さんたちが4人しかいないことに気づいて、

「もう1人はどうされたんですか？」

と聞いた。

「まさか、高木刑事頭数揃えられなかったんじゃない？」

と園子が疑わしそうに聞くと刑事さんの1人が苦笑しながら、

「もう1人なら事件の捜査で10分くらい遅れるってメールが来たよ…そろそろ来るんじゃないかな？」

と答えた。

そのとき、

「すみません！！遅れました！！」

と新一が入ってきた。

なんで、なんで新一がこんな所に現れるの？とわたしは混乱して何も考えられなくなってしまった。

07:s i d e 蘭(後書き)

今日、急いで書いたので、少しおかしいところがあるかもしれませんが、
んがご了承ください。

新一君がやってきたときわたしは心の中でニヤリとした。

実は高木刑事に合コンの面子を集めてくれるように頼んだ（脅した）とき絶対に新一君を誘うように言っておったのだ。

普段なら新一君は合コンに参加することはないだろうけど今回は高木刑事に誘われたら参加するように新一君にも言っておった。

新一君と蘭を合コンで引き合わせたのは、蘭も新一君もお互いにお互いのこと好きで好きでたまらないくらい好きなのに蘭は新一君のこと避けてるからだったら2人を会わせてさっさと元サヤさせちゃおう！って思ったからよ！

まあ、かなりの荒療治だけど蘭にはこれくらいの方がいいわ！

まっ、合コンにしたのは蘭も新一君もよくモテるからモテてるお互いを見せてお互いに妬かせちゃおうって腹だけだね…。

新一君が事件の捜査でまだ来てないって聞いたときは内心焦ったけどどうやら無事解決できたみたいね…。

「あれ？新一君！！なんでアンタが来るねよ？アンタ警察じゃないでしょ？」

と新一君を呼んだのが蘭にわたしだとバレないように言っと新一君は、

「しゃーねーだろ？高木刑事が頭数足りないからどうしても参加してくれって言うから…にしてもあの人、自分が参加する合コンじゃないのになんであんな必死だったんだ？」

と話を合わせてくれた。

すると、

「えええ！？園子って工藤新一と知り合いなの！？」

「しかもけっこう親しげだし！！」

と一緒にきている友達に驚かれた。

そつえば今回合コンに誘った友達って蘭と新一君の関係知らない

い子たちしか呼んでないんだっ…とおもいながら、

「小学校のときからの腐れ縁よ…」

と答えた。

すると友達の1人が、

「蘭って園子と小学校からの親友だったよね？じゃあ蘭も工藤君と昔からの知り合いなの？」

と蘭に聞いた。

蘭が切なそうに笑って、

「うん…幼なじみ…」

と答えるとその友達は、

「こんな有名人が幼なじみだなんていいな…」
と言っていた。

その後、始めの方は蘭も新一君もそれぞれ異性に話しかけられていたけど新一君は蘭のことばっか気にしてて受け答えが適当だし、蘭は新一君が来てから心ここにあらずってかんじでいるせいで新一君が蘭に、蘭が新一君に妬くほどモテてないし、それどころか新一君と蘭の間に会話がまったくない…ってこれじゃわたしの作戦まったく効果なしじゃない！！

…こうなったら最終手段でいくしかないわね…。

わたしは30分くらいで効き目が切れる睡眠薬を取り出し、心の中で、『蘭ゴメン！！』と謝りながら蘭のお酒に入れた。

09:side 蘭

わたしはいつの間にか眠っていて、とても安心できるぬくもりを感じていた。

しばらくして眼が覚めるとわたしは誰かの背中に負ぶさっていた。
「えっ!？」

と混乱したように呟くとわたしが負ぶさっている人が、
「よう!目が覚めたか？」
と振り向きながら言った。

その人を見てわたしは思わず、

「新一…」

と言ってしまった。

そう、わたしを背負ってくれたのは新一だった。

なんで新一に負ぶさっているのかわからず混乱して、

「…なんで？」

と呟くと新一は、

「合コンの途中でオメーが酔いつぶれて寝ちまってよ…園子にオレはオメーん家知ってるから送って言って言われたんだよ…けどオメーが今住んでるアパートがどこか知らねーからよ、今毛利探偵事務所に向かつてる途中…」

と説明してくれた。

「わたし1人で大丈夫だから…降ろして!」

と言うと新一はまた振り向いて、

「バー口!!酔いつぶれて眠っちまうほど酔ってる女を夜道に1人で歩かせるなんて危険なことできっかよ!?恋人じゃなくなってもオメーは大切な幼なじみには変わりねーしな…」
と言った。

やっぱり新一って優しいね…。

わたしは新一の優しさに甘えなくなっただけ、

「わかった…送ってもらおう…でも自分で歩けるから…」
と言って新一の背中から降りた。

久しぶりに新一と並んで歩いたけどただの幼なじみって言い張っていた頃よりも新一が遠く感じた…。

けどこれもわたしのせいだし、仕方ないよね…。

しばらく2人とも無言だったけど不意に新一が、

「な、なあ…」

と話しかけてきた。

「…何？」

と返すと新一は、

「やり直せねーかな？オレたち…」

と言ってきた。

「えっ!？」

とわたしが立ち止まって新一の方を見ると新一も止まって真っすぐわたしの方を見て、

「オレはまだ蘭のことが好きだ！できるならオメーとずっと一緒にいたい…」

と言ってくれた。

新一のセリフにわたしは驚いて呆然としてたけどしばらくして目を伏せて、

「そんなの…今さら無理だよ…」

と言った。

すると新一は、

「そっか…」

とだけ言ってまた2人とも無言で歩き始めた。

ごめんなさい新一…本当はあなたのことが大好き…でもわたしじゃダメなの…わたしじゃあなたの力になれない…わたしじゃあなたの足手まといにしかない…新一にはもっと新一にふさわしい人がいるから…だからこんなバカな女は忘れてその人と幸せに…でも、わたしがあなたのことを密かに想い続けるのは許して…絶対にあな

たに迷惑はかけないから…。

とわたしは心の中で新一に謝りつづけた。

本当は新一がまだわたしを想い続けてくれてることがすごく嬉しかった…あんまり嬉しくてOKしそうになった…でもわたしにそんな資格はない…。

わたしは泣きそうになっているのを新一に知られたくなくてずつとうつむいていた。

毛利探偵事務所に着いたわたしは無言のまま新一と別れて家に入った。

突然帰ってきたわたしにお父さんは驚いていたけど、園子とこの近所で飲んでいて鳥矢町のアパートにかえるより近かったからという説明に納得してくれた。

わたしは自室に入るとお父さんに気付かれないように声を出さずに泣いた。

どうしてわたしはこんなに新一のことが好きなんだろう？…勝手に新一に別れを告げたくせにどうしてこんなに悲しいんだろう？…どうしてわたしは新一の足手まといにしかないんだろう？…

わたしはこんな思いを抱きながらずっと泣き続けた。

でもいくら泣いてもわたしの心はまったく晴れる気配を見せなかった。

10:side園子

『…わりい…』

「ちよつと新一君!!」

『プー…プー…』

わたしは虚しい機械音しかないケイタイを少し乱暴に閉じた。

昨日の合コンで睡眠薬で眠らせた蘭を新一君に送らせてどうなたかを聞いたんだけど新一君はみごと撃沈したらしい…。

しかも、

『もう捜査しなくていい…』

とまで言われてしまった…。

つたく…普段はバカみたいに諦めが悪いくせになんでこんな大切なトコロで諦めちゃうのよ!?あの推理バカ!!

だいたいわたしは新一君のためにやってんじゃないのよ!蘭のためにやってんのよ!!

…ってことで勝手にやらせてもらっわ!!

ということ、仕事終わってからわたしは鳥矢高校の校門の前で蘭待っている。

時々部活帰りの高校生に不思議そうな目で見られけど、蘭が来るまでそんなの無視!!

30分くらい待ってようやく蘭が出てきた。

「よっ!」

と手を挙げながら言うと言は驚きながら、

「園子!!どうしたの!?!」

と聞いてきた。

「昨日はゴメンね…新一君と再会させちゃって…気まずかったよね…」

と謝ると蘭は切なげに微笑んで、

「気にしないで…」

と言った。

その表情があきらかに無理してる表情だったからわたしは驚いて、
「ちよつと大丈夫！？なんかすごい無理してるって顔だよ…」

と言うと、

「やっぱり？…生徒にまで心配されちゃったよ…『毛利先生何かあったの？』って…」

と蘭は切なげに笑った。

「昨日…何があったの？」

新一君からの電話はダメだったってことだけで詳しいことは何も聞いてないからわたしは蘭に聞いてみた。

蘭は少しためらいぎみに、

「『オレたちやり直せねーかな？』って言われた…」

と答えた。

「OKすれば良かったじゃない…」

と言うと蘭は悲しげに首を振って、

「新一にはわたしじゃ…ダメだよ…」

と言った。

「それ…どういうこと？」

と聞くと蘭は真つすぐわたしを見据えて、

「園子には教えられないよ…だって…園子に教えたらすぐに新一に知られちゃうでしょ？」

と言った。

「えっ…？」

と驚いているわたしに蘭はかまわず、

「園子だって新一がわたしのアパートどこか知らないの知ってるはずなのにどうしてわたしを新一に送らせたんだろ？って引つかかってたんだ…で、さっきわたしが『新一にやり直そうって言われた』って言ったとき、わたしがどう答えたか言う前に園子『OKすれば

良かったじゃない…』って言ったよね？…つまり園子はわたしがOKしなかったことを知ってたんだよね？」と続けた。

凶星を突かれて答えられずにいると蘭は、

「新一に聞いたんでしょ？…つまり園子は新一と連絡を取り合ってるってことだね？…このことは新一には絶対知られたくない…だから園子にも教えられない…」

とわたしのことを真つすぐ見据えたまま言った。

初めての蘭からの拒絶にわたしはしばらく呆然としていた。

この時わたしは蘭の心に穴を開けている何かは思った以上に大きいことを悟った…。

10:s i d e 園子(後書き)

奇跡的に2日連続で更新できました!!

ですがたぶんまた少し更新が空くと思いますすいません…。

ですが、これからもよろしくお願いします!!

11: side 新一

園子に依頼を断ってからオレはボーッとタバコを吹かしていた。オレは普段タバコを吸わないが蘭と別れてから、今のように蘭のことを考えているとき蘭のいないストレスから逃げるかのようにタバコを吸うようになった。

何本目かのタバコが終わったとき、
ピンポン
とチャイムが鳴った。

今日は仕事する気になれねーから居留守を決め込むことにしたが、しばらくして今度は、
ピンポンピンポンピンポン
と連打された。

こりや依頼じゃねーな…依頼人ならチャイム鳴らして出なければ留守だと思って帰るだろうし…と思い玄関に出るとメチャクチャ不機嫌な顔をした灰原がいて、

「アンタ、さつさと出なさいよ!!」
と言われた。

「オメーがチャイム連打なんて珍しいな…」
と言うと灰原はため息をついて、

「居るとわかってる相手に居留守使われたら連打したくなるわよ…」
と言われた。

「ま、まあ上がれよ…」
と話を逸らすために言うつと灰原は再びため息をついて部屋に上がって行った。

「で、どうしたんだ？」

と灰原にコーヒーを渡しながら言う。と灰原は、

「本当は冷やかしに来ただけだよ。アナタの様子から止めにしたわ……」

と答えた。

「へ？」

と灰原の言っていることがよくわからず聞き返すと灰原は、

「昨日、円谷君が塾の帰りにアナタと蘭さんが並んで歩くところを見たって言うてたから元サヤしたんだと思って冷やかしに来たけど……アナタの様子から蘭さんに言われたってわかったから止めにしたのよ……」

と言われた。

ハハ……光彦に見られてたのか……蘭のことで頭がいっぱいで気づかなかったぜ……

蘭に言われたことでタダでさえヘこんでんのに、探偵として重要な注意力が散漫になってたことを知らされて余計にヘこんだ……

ヘこんでいるオレを見て灰原は、

「まさか諦めてるなんてことないわよね？」

と冗談っぽく聞いてきた。

灰原にとっては冗談だったんだろうけど実際諦めているオレが答えないでいると焦った顔になって、

「ちよっ……ちよっと！アナタ、ホントに諦めてるの!？」

と聞いてきた。

「わりいかよ……」

とオレが投げやりに答えたが、まだ、

「諦めるなんてアナタらしくないじゃない!!それに蘭さんのことでアナタが諦めるなんて……」

とまだグダグダ言うてきたからオレはカツとなり、

「ウツセ……な!!オメーに関係ねーだろ!!」

と声を荒げた。

すると灰原は冷たい目になって、

「呆れた…アナタホントに工藤新一？わたしの知ってる工藤新一はなにがあっても絶対に諦めないような人だったわ…」
と言ってきた。

「どういうことだよ？」

と灰原を睨みながら聞きた。

すると灰原はオレをキツと睨んで、

「そのままの意味よ…わたしの知ってる工藤新一…いえ、江戸川コナンは何があっても絶対に諦めなかったわ！！特に蘭さんのことでは挑みかかるのがバカにしか思えないことにも立ち向かって行つたのに…そんな蘭さんのことしか眼中にないアナタだから吉田さんはアナタを諦めたのよ！！それにわたしだって…」
と言った。

ここまで言つたあと灰原の目は切なげに揺れて、

「わたし…だつて…アナタを元に戻した意味がないじゃない！！蘭さんがアナタを待ち続けてるからアナタは江戸川コナンから工藤新一に戻つたんでしょ？6年前…アナタは蘭さんのトコロに戻るために吉田さんや円谷君、児島君から江戸川コナンを奪つてまで工藤新一に戻つたんじゃない！！それなのに…そんな簡単に蘭さんのこと諦めるなんて絶対に許さないわ！！！」

と灰原は今にも泣きそうな顔でオレに食つてかかった。

灰原の言葉に目が覚めたオレは、

「だよな…諦めるなんてオレらしくね…」

と言つて顔をあげた。

そのとき、オレの顔を見た灰原は安心した表情になり、

「まったく…世話が焼けるわね…」

と呟いていた。

その夜、園子にもう一度依頼を頼むと、園子は散々文句言つた後、

「アンタに言われなくても最初からそのつもりよ!!」
と言って電話を切った。

言われなくてもそのつもりって…それじゃ依頼の意味ねーだろ…。
とにかく、もう絶対諦めねーから覚悟しとけよ蘭!!

11:side 新一(後書き)

蛇足説明ですが、灰原や少年探偵団のメンバーたちは中学1年です。つて、そんなこと計算すればわかるか…。

12: side 蘭

新一と合コンで出くわしてから3日、わたしは未だにボーっとしていた。

おかげで授業で生徒でも間違えないようなミスをしたり、空手でケガしそうになった…。

さすがに生徒たちにも何かあったと勘付かれ心配されたり、男に捨てられただのふられただのウワサまで飛び交っているらしい…。

ホントはわたしが新一のことだったんだけどな…。

と自嘲気味に笑っていると後ろから、

「毛利先生!!」

と声をかけられた。

振り向くと間船先生が立っていた。

「間船先生…どうしましたか？」

と聞くと間船先生は周りに誰もいないことを確認して、

「この間の返事…そろそろ聞かせてもらえますか？」

と言ってきた。

間船先生の言葉にわたしは思わず、

「あっ」

と声を出してしまった。

間船先生には悪いけど、間船先生に告白された後、新一と再会したりで新一のことで頭がいっぱいになっていて告白のことすっかり忘れていた…。

わたしがばつの悪い表情で、

「あ…あの…」

と言いかけると間船先生は、

「ここではなんなので、土曜日に前と同じ喫茶店で…」
と言って走って行ってしまった。

土曜日、わたしはこの間、間船先生に告白された喫茶店に来た。
今回は間船先生の方がわたしより先に来ていてわたしは間船先生
のいる席に座った。

しばらくして間船先生に、

「…この間の答え聞かせてもらえますか？」

と聞かれてわたしは決意を固めた表情をして、

「すみません！！わたしは間船先生の気持ちに答えることはできま
せん！！」

と頭を下げながら言った。

シヨックを受けたような表情をして黙っている間船先生を見て申
し訳なく思ったわたしは、

「本当にすみません…でもわたし…小さい頃からずっと好きだった
人がいるんです…」

と続けた。

これがわたしの答え。

わたしは新一の隣にはいる資格はない…だからわたしは新一から
離れた…。

でもわたしは新一しか愛せない…だから密かに新一のコトを想い
続けていよう…。

新一にも誰にもわたしの想いは気づかないように…。

そんな気持ちで他の人ときき合うなんて失礼なことできない…。

そんなことを考えながらわたしは、

「…小さい頃からいつも一緒にいて、イジワルだけどホントは誰よ
りも優しくて…」

とポツポツと新一のことを話始めた。

なんでこんなこと話始めたのかわたしにもよくわからない…。

でも誰かに話さなくてはいられなくなった。

「…隣にいと落ちていて、逆に近くにいないと心に大きな穴が開

いたように寂しくて…でもわたしは彼の隣にいる資格はないから…
勝手にフツちゃったんですけどね…」

と締めくくって、いつの間にか零れていた涙を1粒拭った。

すると後ろから突然、

「ったつく…だったらなんでフられたんだオレ？」

という声がした。

12:s i d e 蘭(後書き)

お久しぶりです!!

約2週間も空けてしまってますみません…次回はもっと早く更新でき
ると思います。

13: side 新一

オレが依頼の関係で近所の喫茶店で人を待っていると後ろから、
「すみません…待たせちゃいました？」

と蘭の声がした。

振り返るとオレの後ろの席に座っている見知らぬ男に蘭が謝っていた。

誰だ？アイツ…。

蘭にフられた身であるオレが蘭が誰と会おうがとやかく言う資格なんてないことは頭ではわかっている…けどオレはかなりイラついていた。

蘭はオレに気づくことなくオレと向かい合わせになる席に座った。

オレはしばらく聞き耳をたてていたが2人とも黙っていた。

デートってわけじゃなさそうだな…。

とオレが思ったとき男の方が、

「…この間の答え聞かせてもらえますか？」

と蘭に言った。

もしかしてアイツ…蘭に告ったのか？

とオレが気が気でない気持ちでいると蘭が、

「すみません！！わたしは間船先生の気持ちに答えることはできません！！」

と謝った。

そのときオレは心の中でガッツポーズをした。

その後しばらく沈黙が続いた後、

「本当にすみません…でもわたし…小さい頃からずっと好きだった人がいるんです…」

と蘭は再び口を開いた。

オレは蘭は以前小さい頃からオレのことが好きだったって言うてくれた…もしかしてまだオレのこと好きだって期待していいのか？

「…小さい頃からいつも一緒にいて、イジワルだけどホントは誰よりも優しくて…」

という蘭のセリフを聞いたとき蘭の気持ちが伝わってくるような気がした。

「…隣にいと落ち着いて、逆に近くにいないと心に大きな穴が開いたように寂しくて…でもわたしは彼の隣にいる資格はないから…勝手にフツちゃったんですけどね…」

と言った蘭の声が涙をこらえているときの声だと気づいたときオレは何も考えられずに立ち上がって、

「ったつく…だったらなんで離れたんだオレ？」
と言っていた。

驚いて振り向いた蘭の瞳に涙が浮かんでいて、
やっぱり泣いてたか…。

と思いながら、

「バーロ！…何泣いてんだよ…」

と言うと蘭が、

「しんい…ち…どうして？」

と聞いてきたからオレがフツと笑いながら、

「たまたま人と待ち合わせしててな…」

と答えると蘭は不安げに、

「…聞いてた？」

と聞いてきた。

蘭の質問にオレはニヤリとして、

「悪いな…全部聞こえてたよ…もう一度聞くけど、どうしてオレはオメーにフラれたんだ？オメーが言ってたのはオレのこと…だろ？」
と答えた。

「そ…それは…間船先生の気持ちに答えることはできないけど…理由もなく断ることできないから…つい…」

と蘭はポロポロ涙を流しながら言った。

間船先生ってことはコイツ蘭の同僚か…と思い、未だ状況が読み

取れない様子で呆然としてる間船ってヤツを一瞥したあと再び蘭を見て、「バーロー！オメーが嘘ついてるかどうかなんてすぐわかるよー！さっきの言葉じゃなくて今の言葉が嘘だってことくらいな…それにそんなに涙流しながら何言ってるんだ！？」

蘭は嘘が苦手だ…それに嘘泣きなんてしたことねーのによくそんなこと言えるな…と少々呆れながら言った。

「そ…それは…」

と未だにどうにか誤魔化そうとしている蘭に業を煮やしたオレは少々強い口調で、

「ったつく…前も言ったが、オレはまだ蘭！！オメーのことが好きだ！！もうぜってーオメーのこと放さないからな！！！」

と言った。

13:s i d e 新 一 (後 書 き)

そろそろクライマックスって感じですかね？

14: Side 蘭

「前も言ったが、オレはまだ蘭！オメーのことが好きだ！！もうぜってーオメーのこと放さないからな！！！」

という新一の目があまりに真剣でわたしはとても悲しくなった。

お願い新一…そんな嬉しいこと言わないで…そんなまっすぐわたしを見ないで…離れたくなくなっちゃうじゃない…新一と一緒にいる資格なんてわたしにはないんだよ？

わたしは新一から目を逸らし、

「そ…そんなの、いまさ…」

と言いかけた時、

「いまさらなんて言わせねーからな！！！」
と新一に阻まれた。

驚いて新一の顔を見ると新一は悲しそうな表情をして、

「オレは蘭のことが好きだ！！愛してる！！オメーもオレのことが好きなんだろ？だったらなんでオレから離れようとするんだよ！！？」
と言った。

そのときわたしの中で何かがプツンと切れて、

「わたしのせいで新一は大怪我して…わたしは新一の足手まといにかなれないのに…新一と一緒にいる資格なんてないから身を引いたのに…そんな優しいこと言わないでよ！！！」

と泣きながら言って新一から逃げようと新一に背を向けると、わたしは新一にギュッと抱きしめられて、

「バ—ロ—！資格なんていらね—よ…オレはオメーと一緒にいたい！！それだけで十分じゃね—か…」

と言われた。

「でも…」

と言うと新一は、

「でもじゃね—！！オメーがオレの足手まとい？ふざけんな！！オ

「メーはオレの帰るべき場所だ!!」

と少し強めの口調で言った。

「帰るべき場所?」

とわたしは聞くと新一は優しい口調で、

「ああ…蘭がいたからオレはコナンのときも戻って来れた…蘭が待っててくれればオレはどんな危険な目に遭ってもオメーの所に戻って来れる…」

と言ってくれた。

わたしが黙っていると新一のわたしを抱きしめる力が強くなって、
「オメーを幸せにするなんて言えね…」けど、オメーと一緒に幸せになりたい…だから頼む!!頼むから…オレのそばに居てくれ…」
と言われた。

「……………」

わたしはずっと黙っていた…いや正確には何も言えなかった。

新一の言葉が嬉しすぎて…涙がぜんぜん止まらなくて…新一を好きって気持ちが溢れだして…何が何だかわからなくなっていた。

わたしがずっと黙っていると新一は、

「オメーが居てくれねーと…ダメなんだよ…」

といつも自信満々の新一では想像もできないほど弱々しい声で言った。

その瞬間、わたしの心を縛っていた何かが解かれ、わたしは新一の方に向きかえると、

「新一!!…新一!!…新一!!」

と何度も新一を呼びながら新一の存在を確かめるように新一にしがみついて子供のようにワンワン泣いた。

これがわたしが今できる精いっぱい答え…。

新一はしがみついて泣いているわたしを優しく抱きしめてくれた。
わたしの頭の中には間船先生がいることもここが喫茶店で他のお客さんたちがこの騒ぎに驚いてわたしたちを見てることも何にもなかった。

ただ新一のことで頭がいっぱいで新一の胸の中でただただ泣き続
けていた。

15: side 園子

ヤッバー!! 30分も遅刻だ!!

わたしは新一君と蘭の元サヤ作戦のことで新一君と作戦の練り直しするためにとある喫茶店で待ち合わせしてたけどいろいろ不幸が重なって30分も遅刻していた。

わたしが喫茶店に入るとそこでは蘭が新一君に泣きながらしがみついていた。

……ハッ!!

あまりのことに思考が止まってたわ…。

えーと…わたしは新一君と蘭の元サヤ作戦の練り直しのためにここに来たのよね…なのになんであの2人はラブシーンを演じてるわけ？

わたしが遅刻していた間にちゃっかり元サヤしちゃったのね…。

わたしがここに来た意味ないじゃない…ハハ…。

久しぶりに見るこの夫婦のラブシーンをしばらく見てたかったけどさすがに喫茶店でこんなことされてちゃ営業妨害よね…と思ってわたしは2人に、

「あのさー…せっかくラブラブでいるところ悪いんだけどさー…こんなことされちゃあ営業妨害になると思うよ…」

と声をかけた。

蘭と新一君は店員さんや他の客たちからかなり注目を浴びていたから声をかけるのはかなり勇気が必要だったけど…。

新一君と蘭はわたしに声をかけられて驚いてはなれた後、周りの視線に気づいて顔を真っ赤に染めていた。

「そ、園子…なんでここに？」

と蘭は真っ赤な顔のまま聞いてきた。

そんな蘭の久しぶりに見る表情が可愛くてわたしはニヤリと笑いながら、

「新一君と待ち合わせしてたのよ…アンタたちを元サヤさせる作戦を考えるためにこの推理クイーン園子様がね！！…まあ、わたしが来る前に元サヤしたみたいね…見せつけてくれちゃって！！」
とイタズラっぽく言った。

すると蘭はさらに顔を赤くして、

「な、な、な、何言ってるのよ園子！！」

と言ってきた。

おつ、今まで通りの蘭に戻ってるじゃない！！

なんて考えていると新一君が、

「園子…来てくれて悪いんだが、オレは蘭と2人きりで過ごしたいから帰るな！」

と言つて、呆然としている知らない男の人のいるテーブルに1000円札を置いた。

ハハーン…読めてきたわ…たぶんこの呆然としてる人が蘭に告つて偶然近くで聞いていた新一君が嫉妬して蘭を取り戻したわけね…何をやったかは知らないけど…

と思いつつながらその人を見た。

わたしは未だに呆然としてるその人が少し可哀想になって、

「災難でしたね…」

と声をかけた。

「でもあの2人は2人で1つだから2人の間に入り込むなんて不可能…あきらめた方がいいわ…」

と言つとその人は、

「ハア…」

と曖昧に答えた。

わたしもとんだ無駄足で少し腹が立つけど蘭のあんな表情久しぶりに見たし…まっいいか…。

と新一君と幸せそうに笑いながら店を出て行く蘭を見送りながら

思
っ
て
い
た。
。

15:s i d e 園子(後書き)

間船先生可哀相に…。
たぶん時間で最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1889w/>

心の穴

2011年12月1日21時51分発行